



Title	はじめに
Citation	シンポジウム報告書：子ども発達臨床研究センター総合研究企画, 2012, 3-3
Issue Date	2013-03-27
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52432
Type	other
File Information	RCCCD_Symposium2012_01.pdf



[Instructions for use](#)

はじめに

2011年3月11日以後、多くの人々の不安感は、人間としての存在のレベルにまで達しました。しかし、あの震災と事故の以前から、人間らしい生存が脅かされる事態は広範に出現していました。誰もが懸命にもがいているにも関わらず、姿の见えない巨大な圧力によって押し潰されるかのごとき状況は、職場でも、家庭でも、そして学校でも発生しています。教育の使命が人間の発達の保障にあるのならば、存在の不安定化は、教育の前提条件を掘り崩し、発達の可能性を閉ざす事態のようにも見えます。

このような問題意識から、昨年は「遊ぶ・学ぶ・働く」と題する総合研究を企画しました。学びの場から遠ざかって（遠ざけられて）しまう子どもや若者の背景にある問題を、人間発達を主導する活動に即して検証してみることが課題でした。そこから浮かび上がってきたのは、「時代が締め出す」（青木省三）ことによって子ども・若者やその家族に「生きづらさ」がもたらされているという事実でした。

同時に、私たちは「締め出された」領域に潜む新たな人間発達の可能性を確認しました。「生きづらさ」に直面せざるを得ない領域は、一方では、存在も意味も不安定化し、確かなものが何もない世界ですが、他方では、締め出した領域を逆に包摂する新たな世界を生み出す可能性があります。

そこで、今年の総合研究企画では、時代によって締め出され、「生きづらさ」に満ち溢れた領域において生成する人間発達の可能性とその実現条件について考えてみることにしました。「生きづらさ」が貫徹する世界に人間的解放に至る希望の扉を見出すことが、はたして可能なのか？ 生存を問わねばならない時代において教育の可能性を語る資格は、この間に答えることなしには与えられません。

2日間にわたる講演とシンポジウムでは、時代に締め出され「生きづらさ」を抱える人々が、支援の「対象」ではなく、自らを、そして時代を解放する主人公となるような学びの在り方と、そのような学びに基づく学校の可能性が明らかにされました。それはまた、人間らしい生存を保障するための3つの柱である教育・福祉・労働が結びつくときに、それらの本来の意義が回復されることをも明らかにしました。

私たちは、ここから発達とその支援に関する新しい概念を探求するとともに、人間発達という価値を最優先にする新たな社会像を模索していきたいと考えています。本報告書を手にして頂いた皆様との討議の機会が持てることを楽しみにしております。